

知求会ニュース

2007年05月

第22号

◎ 博士前期課程、入学おめでとうございます！

2007年4月9日月曜日午後1時30分から宇都宮市文化会館にて、2007年度入学式が開催されました。学長式辞は宇都宮大学 HP(アドレスは下記参照)に、各学部等同窓会連絡協議会式辞は国際学部同窓会 HP(アドレスは下記参照)に掲載されています。

(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/gakuchou/shikiji-nyugaku-19.html>) 宇都宮大学 HP

(http://www.afis.jp/mt-static/archives/2007/04/post_19.html) 国際学部同窓会 HP

今年度の入学者は、国際社会研究専攻の第9期生 五十川雅彦さん、于 傲さん、河田裕親さん、グエン ティー タン ハンさん、呉 鷹さん、聶 磊さん、孫 娟さん、武石智史さん、崔 寶允さん、王 宝玉さんの10名と国際文化研究専攻の第9期生 稲嶺麻希子さん、郭 旭茹さん、呉 艾彌さん、史 欣悦さん、館野 梢さん、池 月紅さん、張 新麗さん、富田茉莉さん、堀江賢一さん、松原真実子さんの10名、そして、国際交流研究専攻の第4期生 鳥云徳力格尔さん、遠藤 歩さん、大谷桂子さん、佐藤玲子さん、薩 日娜さん、根本久美子さん、橋爪亮太さん、茂櫛 勉さん、芦 暁博さんの9名で、計29名でした。

◎ 博士後期課程、入学おめでとうございます！

今春宇都宮大学大学院 国際学研究科博士後期課程に入学する坂本文子(国際社会研究専攻・第5期生)さん、岡本義輝(国際社会研究専攻・第6期生)さん、宮本玲子(国際文化研究専攻・第7期生)さん、方 小賢(国際交流研究専攻・第2期生)さん 進学おめでとうございます。

また新たな入学者に齋藤明宏さん、戸川正人さんの計6名が博士後期課程第1期生として入学されました。今後の研究成果に期待したいと思います。(博士録01を参照)

◎ 着任教員紹介その8

重田康博 (SHIGETA Yasuhiro)

専門：国際 NGO 論、国際協力論、グローバル・ファイナンス論

前職：九州国際大学国際関係学部

趣味：ジャズ・ロック鑑賞、ラーメン食べ歩き、イングリッシュ&アイリッシュパブ飲み歩き、サッカー観戦 NGO 活動への参加、地域おこしの現場訪問

自己紹介：4月から新しく赴任することになりました重田です。以前の大学は7年間在籍し、NGO 論、国際協力論を担当していました。大学は北九州市の八幡にあり、住まいは福岡にありました。大学の仕事の他に、福岡にある JVC 九州ネットワークの代表をやったり、東京にあるオックスファム・ジャパンの代表理事など NGO 活動で結構忙しくしていました。九州にいる時は、山村塾、合鴨農業の古野さん宅、フェアトレードコーヒーのウィンドフ

アーム（以上福岡）、水俣（熊本）、諫早（長崎）、など地元の地域おこしの現場を学生たちと訪問しました。私のフィールドは、カンボジア、ラオスですが、学生をスタディーツアーで連れていきました。宇都宮でも学生たちとできるだけ地元の地域おこしの現場を訪問してみたいです。皆様いろいろと教えて下さい。どうぞよろしく申し上げます。

研究室訪問 13 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第13回目には、今春定年退職された元・国際文化交流研究講座所属の小池清治先生にお願いしました。（原稿は3月中に受理）

「退職に際して」

＝風^{かぜ}に靡^{なび}く 富士^{ふじ}の煙^{けむり}の 空^{そら}に消^きえて 行^{ゆく}方も知^しらぬ 我^{われ}思^{おも}ひかな 西^{さい}行^{ぎょう}＝

名誉教授 小池 清治

2007年3月31日をもって、36年間に亘る教職生活に別れを告げます。

1971年4月、横浜のフェリス女学院大学文学部国文科の専任講師となりました。この女子大で5年過ごした後、1976年4月に宇都宮大学の教育学部に赴任しました。

当時は、宇都宮駅の東口一帯は田圃でした。やがてイトーヨーカドーなどが出来、アッという間に、市街化していきました。

1994年、国際学部の発足と同時に教育学部より移籍と成りました。それから13年、夢のようです。

副題の和歌は、2月20日、国際学部主催の最終講義で紹介したものです。

趣意は、人間の目に直接見えるものは「煙」なのですが、「煙を靡」かせているものは「風」である。これと同様に、文字などを介して目に見える「ことば」を動かしているものは「人間」であり、「ことば」に関する諸現象を理解するためには、「人間的要素理解」が不可欠だというものでした。

従来「国語史」「日本語史」の教科書には、「ことば」に関する諸現象ばかりが記述されており、人間は不在でした。小池の学問は、「人間不在の国語史・日本語史」に「人間」を持ち込んだことです。

『日本語はいかにつくられたか？』（ちくま学芸文庫）では、太安麻呂、紀貫之、藤原定家、本居宣長、夏目漱石、時枝誠記の6人を取り上げました。この本は世の迎えるところとなり、2007年3月現在で、7刷、合計14,500冊出版されています。

「ことば」の解明には、人間的要素の理解が大切なのだと肝に銘じてください。

実社会に出ると、良い時ばかりではないということを実感することがあると思います。

拙著で取り上げた6人にも、不遇の時がありました。その不遇の時こそ、実はチャンスなのです。鬱屈した心を抱いて、世に出る際の準備をすることです。じたばたせずに、頭角を表すために実力を蓄えることです。

版画家の棟方志功(1903～1975)のことばに「冬ナクバ 春ナキニ」ということばがあり

ます。辛く、厳しい「冬」が人間、特に、優れている人間には必要なのです。どうも、神様は、人間をそのように造っているように思われます。

皆さんが、大成することを心より祈っております。

四月からは、作新学院大学人間文化学部で非常勤講師として、「日本人の言語史」「言語と認識」を教えます。木曜日の午後 2 時 40 分から 4 時 10 分までの一コマ教えます。是非ともという時には、木曜日の 4 時過ぎに訪れてみてください。

NEW

博士録 01 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 1 回目には、今春宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士後期課程に入学した、**岡本義輝**(国際社会研究専攻・第 6 期生)さん、**斎藤明宏**さん、**坂本文子**(国際社会研究専攻・第 5 期生)さん、**戸川正人**さん、**方小賛**(国際交流研究専攻・第 2 期生)さん、**宮本玲子**(国際文化研究専攻・第 7 期生)さんらにお願いしました。(学籍番号順)

①氏名：**岡本義輝**

②出身大学院：宇都宮大学大学院 修士課程 国際学研究科 国際社会研究専攻

③専門：電子工学 電子回路設計 経営学 国際経営論

多国籍企業の R&D (設計開発) 部門動向

④指導教官：磯谷 玲先生

⑤趣味：旅行

⑥研究テーマ：日系 AV (オーディオ・ビデオ) R&D 部門のマレーシア移転の課題

⑦自己紹介：1943 年生れで間もなく 64 才です。1967 年に静岡大学工学部電子工学科を卒業し、当時の早川電機工業 (株) (現シャープ) に入社しました。入社後 1 年間は出身地大阪の本社勤務でしたが、1968 年に栃木県矢板市に新設された栃木工場に転勤となりました。以降約 35 年間、主としてテレビ、ビデオ、ムービー (動画ビデオカメラ) の商品開発を担当してきました。自分の設計した商品がヒットし、それを国内、海外の量販店等のお店で見る事が出来るのは技術者冥利に尽きるものでした。

2000 年 4 月から 3 年 3 ヶ月間、マレーシアの設計会社シャープエレクトロマレーシア (略称：SEM) に赴任し 160 人のローカル技術者と 40 人の日本人技術者の指導育成に当たりました。そして 2003 年 7 月に帰国と同時に定年退職しました。

8 ヶ月後の 2004 年 4 月に宇都宮大学大学院に入学しました。マレーシア時代の経験および疑問を修士論文「マレーシアにおける日系 AV 設計開発の拡大発展に向けて - For the Expansion and the Development of Audio Visual R&D in Malaysia」にまとめ、今年 3 月に修了しました。博士後期課程では同じ課題を経営学の国際経営論・多国籍企業の枠組みの中でアカデミックに論じて行きたいと考えています。

①氏名：齋藤明宏

②出身大学院：南クイーンズランド大学応用言語学修士課程

③専門：応用言語学、社会言語学

④所属研究室：田巻研究室

⑤趣味：映画鑑賞など

⑥研究テーマ：移民児童の日本社会(特に教育・学習)への適応

⑦自己紹介：はじめまして。今春国際学研究専攻に入学した齋藤です。専攻分野は広義の応用言語学で、特に言語とアイデンティティや文化の関係など心理、言語、教育の関わる学際的なテーマに関心があります。修論では英語学習者の態度と動機付けを調査しました。その際、多文化主義、バイリンガリズム、言語政策などを扱う社会言語学に出会い、言語習得過程や制度としての言語教育を文化との関連で、また社会現象の一つとして捉える視点に触れ、その面白さに取りつかれました。昨年宇都宮大学で開かれた外国人児童のシンポジウムが国際学研究科入学のきっかけの一つになったのをはじめ、宇都宮大学には他にも何かとご縁があります。博士では、日本文化に根ざした教育制度における移民児童生徒の適応をテーマに進めていく予定です。宇都宮大学で過ごすのは初めての経験で、まだ右も左もわからない状態です。一日も早く適応できるようご指導のほどよろしくお願ひします。

①氏名：坂本文子

②出身大学院：宇都宮大学大学院 修士課程 国際学研究科 国際社会研究専攻

③専門：国際社会学

④所属研究室：田巻研究室

⑥研究テーマ：外国人児童生徒の教育環境問題

①氏名：戸川正人

②出身大学院：大学院は出ておりません。

③専門：大学時代の専門は社会学ですが、大学を卒業してから20年以上経過しており、社会経験を踏まえれば「国際協力」ということになると思います。

④指導教官：友松教授

⑤趣味：読書、旅行、時計蒐集

⑥研究テーマ：日本型援助の本質について（仮称）

⑦自己紹介：現在、独立行政法人国際協力機構（JICA）に勤務する社会人です。これまで研究とはあまり縁がありませんでしたが、この機会に皆様方からのご指導を得ながら、国際協力の現場での経験を体系化することができればと考えております。縁あって宇都宮大学で勉強することができることを本当にうれしく思っております。多くのことを吸収したいと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

①氏名：方 小贇

②出身大学院：宇都宮大学大学院 修士課程 国際学研究科 国際交流研究専攻

③専門：日本語と中国語の比較研究（対照言語学）

④指導教官：佐々木一隆先生

⑤趣味：読書、旅行

⑥研究テーマ：日中両言語における身体語彙慣用句の比較考察

⑦自己紹介：中国の福建省から参りました方小贇です。大学に入って日本語を専攻として勉強しはじめました。日本語と日本文化に魅かれ、留学生の一員として来日し、すでに4年半ぐらい経ちました。年齢は増えつつありますが、日本語に関する知識はあまり増えない傾向で、とても心配でいられません。これから先生方のご指導とご鞭撻のもとで頑張ります。修士課程では、小池清治先生と佐々木一隆先生のもとで「目」、「心」、「気」を中心に日本語と中国語における身体語彙慣用句の比較研究を行いました。論文を書く際には大変だったが、みんなと一緒に頑張るととても楽しかったです。博士後期課程においては、引き続き、両言語の慣用句の比較研究を行いたいと思います。これからもみなさんと一緒に良い博士論文を書くために頑張っていきたいと思います。

① 氏名：宮本玲子

②出身大学院：学部 大阪外国語大学

修士 宇都宮大学大学院 修士課程 国際学研究科 国際文化研究専攻

③専門：比較文化

④指導教官：佐々木史郎先生

⑤趣味：音楽を聴くこと

⑥研究テーマ：韓国の庭園文化

⑦自己紹介：日本語学校で日本語教師として働いています。17歳、15歳、8歳の男の子の母親もしているため毎日が時間との戦いです。忙しいながらも修士課程での研究はとても楽しいものでした。博士課程は楽しいではすまされないでしょうが、生涯のライフワークとして研究を続けたいと思っていますので、後悔のないよう研究に励みたいと考えています。

知究人 07 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー（ちきゅうびと）を設けました。第22号の第7回は、予定の寄稿者から入稿がありませんでしたのでお休みします。

フォーラム 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2007年の臯月を迎えて、皆様慌しいことと思います。（原稿集めに苦勞しています。）今回は、国際

交流研究専攻第1期生友松研究室OB・矢島 亮一さんと国際社会研究専攻第6期生今井研究室OG・森澤 絵美さん、国際文化研究専攻第6期生小林研究室OG・安部佳奈子さんにお祈いしました。

「語り継ぐもの」

矢島 亮一

「語り継ぐものを見つけて継承していきたい」「できるかな？でも、それが最低限の我々NPOの責任かもしれない」。最近、スタッフとこのようなやりとりをした。私たちは、JICA青年海外協力隊OBである。それぞれが、開発途上国といわれる物資が欠乏している貧しい国で活動してきたが、途上国の人々の心は現在の日本より健全であったような気がする。我々は、この経験を日本社会に還元して行きたいと考えている。

日本のひとつの時代（戦後、手に入れた「豊かさ」の時代）は終わりを告げた。しかし、「新たな時代」の始まりを告げる鐘が鳴り響かない。「失われた十年」を経て、次第に「断絶と閉塞（へいそく）」が支配的になってきた。残念ながら、この傾向は親子、友人、職場、学校、地域などいたるところに、つまり社会全体にひずみをもたらしているような気がする。

我々日本人は、昭和三十年代後半から始まった高度成長経済に支えられ、気づいてみれば先進国の仲間入りをしていた。我々の先輩方がこの経済を作り上げて来たのであろうが、その先輩方が「我々は、現在ある豊かさを手にするため、必死に苦勞してきた」と語っても、この表現は力を持たないような気がする。繁榮やぜいたくは、それを獲得した瞬間から日常化し、当たり前のこととして色あせていくものであるから。

『ALWAYS 三丁目の夕日』という映画では、昭和三十年代前半の「決して豊かではないが、温もりある人たちの世界」がほのかに描写されている。共感した人たちは少なくないであろう。地域の共同体が脈々と存在していた時代である。この状況は繁榮の過程で失われてしまった。そして、このように失われたものがあつたことを、語り継ぐことが重要であろう。

経済大国たることを最優先してきた過程は、地域共同体を崩壊させ、「心の貧しさ」をもたらした。心の貧しさとは、他者を想像する力の欠如である。この想像力は他者の「弱さ」を受け止め、共同性の中で解決していく体験から身についていく。人間がもつ「弱さ」は自然に表現できるはずなのだが、それが「しづらい」社会になってしまった。

子供たちですら、自分の弱さを悟られまいというプレッシャーと闘っている。大人たちは信じがたいこの現実を引き受けることは不可能だとあきらめ、直視することを避けている。これこそが「断絶と閉塞」状況なのであろう。確かに難題であるが、難しく考えない方がいい。こう考えたらどうか？「個々人は弱い。自分の弱さを表現することから始めよう」と。

私たちが生きるこの社会で大切なのは、他人の心を想像する力である。想像力が心の豊かさにつながっていく。昭和三十年代に戻ることはできないが、失われたものを再構築することは可能である。このような視点で<語り継ぐもの>とは何かを世代を超えてともに語り合っていきたい。次世代の社会のために。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第1期修了生)

「駒澤大学法科大学院」

森澤 絵美

私が駒澤大学法科大学院に入り、早くも一年が過ぎました。

法学部出身ではなく六法もあまり開いたことがない私にとって、はじめは何もわからず、講義についていくことさえ必死でした。しかし、今は、日々の予習・復習、旧司法試験の過去問題に取り組む自主ゼミ、修了生のサポートのおかげで、「法」というものが何となくわかってきたような気がします。

そもそも、私が弁護士になりたいと思い法科大学院に進学したのは、宇都宮大学院で、女性の人権や人身売買についての研究をしたからです。このような人権を侵害されている人たちをより実効的に救済できるのは何かと考えた場合、それは「法」であり、この法を道具にして活躍する弁護士を目指したいと思いました。そして、国際法関係科目が充実している駒澤大学への進学をきめました。

私が通う駒澤大学は、1クラス30名以内という少人数教育が徹底しているというところに最大のメリットがあります。そのため、教授と生徒の距離が近く、毎回双方向の講義が行われています。この双方向授業は、自分の知識・理解が問われるので、予習をしっかりしていくということは欠かせませんが、自分の理解不足の部分がわかる機会にもつながります。また、法科大学院では、ただ法律知識を暗記して覚えるだけではなく、自分で「考える力」の取得が求められます。例えば、私が弁護士になった場合、クライアントのために、法という道具を使って、何ができるか、相手方の弁護士の反論を考えながら、探っていく、といった場合に考える力が必要となります。この「考える力」を身に付けることは、私の現在の目標でもあります。

最後に、法科大学院を目指す人、また興味をもっている人へ。

法科大学院は、司法試験を目指す以上、決して甘い場所ではありません。しかし、法科大学院ができたことによって、これまで法学を学んだことのない人にも法曹になるチャンスが与えられました。このチャンスをいかし、自分の信念と覚悟をもって、法科大学院入学、そして共に新司法試験合格を目指していきましょう。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第6期修了生)

「近況報告」

安部 佳奈子

栃木県にある某私立高校に勤務し、1年が過ぎました。この春からは1年生の担任を務めることになり、また気持ちを新たに生徒たちと向かい合っています。

私は、宇都宮大学国際学部を卒業し、地元・福島県の県立高校で約1年間常勤講師として勤務したのち、大学院に進学し、修士課程修了と同時に現職に就きました。そもそも私立高校で働くことを最初から考えていたわけではなく、実を言えば、県立高校の教員を目指し教員採用試験を受験したものの歯が立たず、大学に募集が来ていた本校を受験し採用されたというのがその経緯でした。

本校は20年程前には筋金入りのヤンキー高校として有名だった男子校でしたが、現在は厳しい生徒指導の効果もあって、すっかり品行方正な高校へと変わりつつあります。在籍する生徒の学力は幅広く、国公立大学や難関私大合格を目指すコースから、何とか無事卒業し就職させることを目標とするコースまであります。

さてそのような高校で、学習意欲の低い生徒たちを受け持つとしたらいったい彼らにどのように接したらいいだろうかと考えをめぐらせていた私でしたが、平成18年度が始まり配属されたのは、設置されて6年目の「超進学コース」(仮名)でした。まだまだ地域の知名度は低いのですが、少人数クラス(1クラス平均18名)での熱心な指導により、現在着々と難関大学への進学実績を挙げている学科です。私自身が進学校の出身で、以前に勤めた福島県の高校も進学校だったこともあり、私としては、ホッと胸をなでおろした気分でした。

私立学校ということで、経営者側と教師間の確執や複雑な人間関係など、校内にはわざわざわしいことがかなりたくさんあるようですが、幸いにも私が所属する学科はそれらの事柄から切り離された環境が整えられており、他の先生方も優秀で人格者ばかりという、ありえないほど恵まれた職場です。

とはいえ、4月からいきなり進学コース2年生の担任となって19名の男子高校生をまとめ、難関大学合格を目指す彼らに英語の授業をするに当たっては、この1年間大変な苦労がありました。クラス経営においては、すでに高校1年の1年間を同じメンバーで過ごしてきた19名に対し、いきなり担任として現れた私はまるで「新参者」、「部外者」でした。また、男子校ということもあり他に女性教員は少なく、生徒たちも「若い女性」をどのように担任として認めればいいのか戸惑っているようにも見受けられました。なかなか彼らに「受け入れられた」と感じる事ができないままに、それでも日々ホームルームや、面談、学校行事、授業を経ていく中で、私自身はすぐに彼ら一人ひとりに愛着を感じるようになり、まるで年の離れた弟がいきなり19人できたような気持ちで、彼らのいい部分もだめな部分も受け入れられるようになりました。

それでも、文化祭や修学旅行の際にはクラス内で様々ないさかいが起こり、自分のふがいなさやクラスをまとめられない申し訳なさに、帰宅しては涙していたこともありましたが、年度が替わって彼らは3年生になり私は直接彼らとの関わりが無くなり、辛かったことも今はいい思い出になりました。それでも廊下で彼らを見かけるときや英語の質問を受けるときには、昨年1年間を振り返り、彼らへの学習指導や生活指導は果たして満足にできていたのだろうか、今でも自問自答しています。

ともかく昨年度1年間、他の先生方にたくさんの協力をいただきながらも私はなんとか担任業務をこなしたわけですが、今でも申し訳なく思っているのはクラス経営以上に私のあまりにつたなかった英語の授業のことでです。

大学入学時から今まで「英語を一生懸命勉強しよう」と心に誓い続けてきた私ですが、実際は大学の授業のための勉強しかやってきておらず、その結果 TOEIC の点数は、院を修了するときですら恥ずかしくてとても人に言えないようなものでした。ですから、4月に高校2年生の前で授業をするにあたり、私は、自分の英語力・指導力にまったく自信がなかったのです。

昨年度、私は受け持ちのクラスの「英語Ⅱ」（週4コマ）と「総合学習」（週1コマ）、同じ学科1年生の「英語Ⅰ」（週5コマ）、そして併設の中学1年生の「英語」（週6コマ）で、週16コマの授業（35時間中〔1日7時限×5日〕）がありました。これは、県立高校の先生方と比べても決して多くはないと思います。しかしながら、初めての担任業務をこなしながら、英語の教科書3冊の予習をし、定期テストや小テストの企画・作成・採点をし、中学生に対しては大量のプリントを作成し、週2回のALTとの授業の準備をし、放課後は宿題の面倒を見ていくのは、なかなか大変なことでした。特に「英語Ⅱ」の授業においては、予習をしながら文法事項をチェックし、わからないことは他の英語の教員に質問しながら「今仕入れたばかりの情報を授業で披露する」、まるで自転車操業のようなものでした。授業中にも、文法事項についての私の知識が浅いために説明が滞ってしまうことも多々あり、今思えば私の「自信のなさ」は生徒に伝わってしまっていたのではないかと思います。終礼のあと、私は毎回ふがいなく悔しくて、教壇で唇を噛み締めていました。

私が持ち続けている彼らに対する「申し訳なさ」は、「つまらない・いまいちの授業を繰り返してしまった」こと以上に、そのような授業で「難関大を目指す彼らの貴重な1年を無駄にさせてしまったのではないか」という思いからきているものです。

仕事が忙しいのは社会人1年目ならば当然のことで、昨年度の英語の授業についての私の膨大な量の反省はすべて、今までの英語の勉強不足から来るものだったと思います。学生時代にもっと一生懸命英語の勉強に取り組んでいれば、と、今でも悔やまれます。ちょっと英会話ができるくらいでは、彼らへの授業にはほとんど役に立ちません。話せる以上に、「なぜここに“of”が付くのか、“,”がなければならないのか、“the”でなければならないか」を、論理的に解説できる確固たる文法力がなければならないのです。

昨年度末私は人事担当者にお願ひし、今年度の3年生の担任を外してもらいました。進

路指導の面でも教科指導の面でも、十分な指導ができる自信がまったくなかったからです。また、昨年度中は他の先生方の授業を見学し、生徒たちが生き生きと楽しそうに英語を勉強している様子を目の当たりにして、強い衝撃を受けました。今年度はそれらを参考に「生徒たちを動かす授業」をすべく全力を尽くしています。

本校での勤務も 2 年目になり、精神的に少し余裕ができ、去年より広い視野で「今なすべきこと」を捉えられるようになりました。今年度担任している 1 年生 17 名もだんだんと学校生活に慣れてきて、にぎやかな明るいクラスになりつつあります。私の英語力・指導力にはまだまだ課題も多いですが、今のところは昨年度より計画的で充実した授業ができています。今後も他の先生方の指導・指摘を真摯に受け止め、昨年度以上に謙虚に、よりよい担任・より優秀な英語の教員に成長していけるよう努力しようと思っています。

蛇足ですが、大学院時代に頻繁にレジュメ作成やプレゼンテーションをしていたことが功を奏して、学科内での研究発表などの際に「資料がよくまとまっている」とか「見やすい、わかりやすい」といった高評価を他の先生方からいただくことがよくあります。様々な事が思うようにならずやきもきする中で、このようなスキルが知らぬ間に身につけていたことは、ひとつ自分の自信になっています。ご指導いただいた大学の先生方に変感謝しています。

辛かったことばかり書きましたが、辛いなりにこの仕事は私に合っていると感じているのも事実です。今後この国の担い手になっていくのであろう生徒たちの成長を見るにつけ、大変幸せな気持ちになります。また若い教員の使命として、大学生活の充実・楽しさを高校生に伝えることも大切だと思い、大学の授業や同期生のことなど機会を見つけては彼らに話しています。特に国際学部・研究科には個性的な同窓生が数多くいらっしゃるので、生徒たちの興味をそそるようです。

今後とも、各方面で活躍されている同窓生の皆さんと交流を続けていければと思っています。つたなく、長々とした文をご精読いただきありがとうございます。また、この文を書くことでこの 1 年を冷静に振り返ることができました。機会を与えてくださった土屋さんに感謝いたします。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第 6 期修了生)

編集後記：限られた時間でのニュース発行、同窓生の皆さんのご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い**：
住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 global@minakuru.net
